

木を美しい何かにするために

観察力をデッサンで手に入れる

岐阜県立森林文化アカデミー 准教授 ● 松井 匠

養われます。

ちよっと立ち上がって隣人の絵を見ると、その人が絵を描いている時間を追体験する感覚を得ることが出来ます。同じものを同じタイミングで描いているので、絵を見ただけで、それを描いた人の気持ちを推測でき、「この線を描くときに強い気持ちで描いているすごいな」とか「こんな難しいところを慎重に描いているので、描いたところがあるな」ということがわかるのです。

これによって、デッサン経験者は絵を分析・評価できるようになります。モノの良し悪しを理解して、自分の経験にすることが出来るのです。

良いものをつくるには、まず観察から。木から良いものをつくるクリエイターを増やしていきたいですね。

呼んでいます。

そう考えると、良い何かをデザインする人は強用美を三つとも学び、理解して調整する必要があります。

では、この中で最も正体がわからなさそうな「美（意匠）」を身に付けるにはどうしたらいいのでしょうか。

そこでデッサンの登場です。建築でも木工でも、良いものを見て分析

し評価できれば、自分の引き出しに入れることができます。その観察する力をデッサンで手に入れようというわけですよ。

デッサンは見たままをそのまま絵に描くというものですが、1人で行うよりも多人数で同時に行うことで、観察力を体得できる極めて優れた手法になります。それは次の3つの観察を同時に行うからです。

1. モチーフ（対象物）
2. 自分の絵
3. 他人の絵

モチーフと自分の絵がずれたら直す、陰影のトーンがずれたら直す、距離がずれたら直す。

これを繰り返すうちに、モチーフを観察する力が付き、僅かな光の差が見えるようになってきたり、2ミリのずれに気がつくようになります。

また自分の絵の印象を観察することで「四角い紙の中で絵が右に寄っているな……」などバランス感覚が

森林文化アカデミーは森林や木材に関する分野で活躍するクリエイターを育成していますがわたしは木造建築教員として建築技術や知識を講義しつつ「デッサン」も教えています。なぜ森林利活用の建築教育でデッサンを教えるのでしょうか。

紀元前のおかしから建築教育では良い建築の在り方として「強用美を備えよ」といわれています。これは「性能（強）、機能（用）、美（意匠）」が塩梅よく備わった建物が良いよ」という意味です。

二千年以上も前の言葉ですが、なんとこの言葉は建築だけでなく木材を使った製品開発においても、家具においても適用できてしまいます。高性能でも野暮ったい木製品は流通しませんし、洒落た造形でも重くて壊れやすい椅子は嬉しくありません。「強用美を良い塩梅にすること」はそれ自体が総合的なスキルで、わたしはそれを「デザイン」と

